

---

# 遠ざかる日常

吾妻 令二

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遠ざかる日常

### 【Zコード】

Z5023A

### 【作者名】

吾妻 令一

### 【あらすじ】

無関係だと思っていた事に遭遇した和也は、つけられるたくさんの中から正しいものを選ぶ事が出来るのだろうか？脳をあるものに侵食された人間と、侵食を辛うじて防いでいる人間との戦いを描いたホラー。

## プロローグ

とある町の片隅の闇で男が走っていた。だが、その様子はどこかおかしい。普通に走つてはいなかつた。息を乱し、足がもつれ、少し後ろを気にしているようであつた。まるで何かから逃げるようになつた。

『最近物騒だから走るのはやめた方がいいんじゃない? ほら、少し前に近くの町でなんか事件があつたつて聞いたし……』

妻の言つことにしてがつていれば、こんな事にはならなかつた。私は今、人の形をしたものに追われている。

家を出て一時間ぐらい経つて、私は人気のない路を走つていた。（……今考えればなんで人気のない路を走つたのだろうか。まつたく今日の私は選択を失敗してばかりだ。）辺りは静寂に包まれている。

フウフウフウ……。

ふと後ろから動物が出すような音が聞こえた。

私が振り返るとそこには人が立つていた。

……人? 人があんな声を出すのか?

フウウウウ……。

人でない声をあげながらキヨロキヨロと周りを見回している。目があつた。

途端にそれは私に向かつってきた。

「えつ! ?う、うわあーーー! 」

反射的に振り返り全力で走つた。というか、逃げた。

あれから何時間経つただろうか。焦りと恐怖で何も考へる事ができない。

逃げて いる最中、隙を見て 飛込んだマンションの中に私はいる。  
(そろそろ出ても大丈夫だな)  
ある程度冷静な思考を取り戻すことができた私は外に出ることに  
した。  
マンションの中からでた途端、目の前が一瞬赤に染まり、そして  
闇に溢れた。

無関係

白い部屋。白い土地。白い世界。……よくわからないが、僕は今、白い空間にいる。

視界の全てが白。その他の色は少しもない。

ふとどこかで水の零が落ける音がした。直後に視界は白から真紅へと一変した。

足元には赤い液体で満ちている。

これは…………血？

反射的に後ずさつた僕の足に何かがつつかかった。恐る恐る振り返ると、そこには……。

「…………俺？」

あ～、起きたくない。

理解できない夢を見ると頭が痛くなる。何せ馬鹿ですから。でも、そろそろ起きなきやな。高校に遅刻する。

リビングに向かつたら、そこには香織がいた。椅子に座つてテレビを見る。「ふあ～、香織、飯は？」

「ない」

「え！？ ないってお前、俺よか早く起きたんじやないの？」

「あんたよりほんの少し早く起きただけよ」

なんかやけにそっけない。寝起きで機嫌が悪いのか？

「早く起きたんなら朝食ぐらい……」

「朝からそうぐちぐち言わないの。住みさせてあげてるんだから朝食ぐらいあんたが作りなさい」

居候の僕にとつてなかなか痛い所突いてきやがる。だけど、僕に

も言ひ分はある。

「『『ここに住みなさいよ』って言つたのはお前じやん」

…………あ、やべ。

「……今すぐ出て行きなさい」

ちひ、失敗した。

「……ごめんなさい。僕が作ります」 そう言つて僕はキッチンに向かつた。

「うどんでいいだろ?」

「うん」

食事を終えた僕は歯磨きしながら、リビングでテレビを見ていた。

『今朝、東京都北区赤羽のマンションの前に全身血だらけの男が倒れているのを近くの主婦が発見しました。身元は同じ北区在住の会社員、菊地信成さんで、警察は死体の損傷が激しいことや、現場の状況から事件の疑いが強いと見て調査を進めていく模様』

「赤羽つてここから近いんじゃない?」 今日、初めて香織から話しかけてきた。機嫌、なおつたのか?

「ここいらへんも物騒になつたわけだ」

「危機感無いわね~」

「俺らには関係ないわ」

そう考えるのが普通だ。こういう事件に巻き込まれる確率はとても低い。まして被害者やそれに親しい者になる確率はさらに低い。まあ、もしなつたら、それこそ悲劇の主人公だな。「わてと、俺はそろそろ行かなきやな」「弁当は?」

「食堂で食うからいい」

そう言つて、口をゆすいで歯磨きを終わらじ、僕は家を出た。

「はい、これで解散~」

陽気な女教師の声が教室に響く。

今日も何事もなく、平和な時間が過ぎていった。まあ、それが普通だけ。『単調な生活には何か刺激か変化がほしいよな』誰かがこんなことを言つてた。

今、僕がしている生活は、紛れもなく『単調な生活』だろう。けど僕はそこに変化や刺激を望みはしない。

現状維持。

両親が死んでから僕はそれだけを望んでいた。  
その時に『単調な生活』が崩れて、変化する苦しみを僕は知つて  
いるからだ。

「お~い、和也?」

不意に後ろから声をかけられた。

「ん? 何?」

振り返り、声かけてきた友達（笹塚 健次）を見る。心なしか心配そうな感じだ。

「お前さつきからなんかぼーとしてたぜ?」

「え? ああ、多分考えごとだと思つ」

「そつか、ならいいや。つーかさこれから原宿いかね? 見てえ服あるんだよね」

「いいよ。少し待つてて、準備する」

「じゃあ、校門で待つてつから」

「ああ、わかった」

教科書を鞄に詰め込みながら返事をした。

玄関を出ると、門のあたりに人影が見えた。みた感じ一人じゃない。

（健次と……あと誰だろ?）

「あ、和也。早く来いよ」

僕に気付いた健次が声をかけてきた。傍らには、女の子が一人僕の方をチラチラ見ながら、何か話している。

「悪い、遅くなつた」

なんとなく冗談を言つてみたら

「まったくだ」

と返された。本気じゃ ないだらうけど。

「少しも待つてないから、大丈夫」

横から片方の女の子が入ってきた。

「あ、そういうばなんで小田桐と神崎がここにいるの？」

今、話に入つてきたのが小田桐 美緒。もう一方が神崎 瑞奈。小田桐は少しチャラい部分もあるが、なかなか整つた顔付きをしていて、男子からけつこう人気がある。神崎は小田桐と対照的に落ち着いた感じで、『内気なお嬢様』というイメージがある。こつちも綺麗な顔立ちをしている。男子から人気があつたようないような……。

「なんでつて、私達はこいつ（健次）に誘われたのよ。悪い？」下から見上げるように睨んでくる。……つ、可愛いじゃねえか

コノヤロー。

「え……あ、いや別に悪くはないよ」

「そ、じゃあ早く行きましょ」

そう言つて一人は歩き出した。

僕は一人の後に続こうとする健次の腕を引っ張つた。

「い、な何すんだよ」

「なんでたかがお前の買い物にあの一人が付き合つんだ？」

「あいつらも買いたい物があるんだよ」

「なるほどね」

……となるとあの一人の買い物にも付き合わなくちゃならないのか。

「ほり、離れてんじやん。急ごうぜ」

……なんか、長くなりそうだな……。

案の定、帰りは遅くなつた。

今の時間は十時半。家まではあと五分程度で着く。その五分が疲れのせいかとても長く思える。

健次の買い物に付き合つたあと、一人が

「行きたい」

つて言つた場所に僕達は付いてまわつた。できればレディースの服やに入りたくないんだけど、ついて行かないところぐちぐち言われる雰囲気だったので、仕方なく一人の買い物に付き合つていた。

帰りに近場のファミレスで適当に夕食をとつて解散した。

（もう、行きたくないな、こいつらとは）

あと少しで家だ。……そいつれば香織に遅れるつて連絡してないな。帰つたらなんか言われるな。

マンションの近くに来たとき、変な感じがした。なんか、いつも通り、じゃない。

理解不可な違和感を感じながら、オートロックのドアを開ける。空気の中に何かが混じつているのを感じる。

（なんだろう、……）

心なしか、自分の家に近付くほど、何かが強まつてきている。着いた。ドアノブに手をかけ、ゆっくり開く。

うううううう。

低い唸り声とともに強烈の匂いが僕の鼻をつく。

（！？なんだ、！？）

ドアの開く音に反応してか、唸り声の主が姿を見せた。

「え！？……人！？」

間違ひなくそれは人だつた。人の形をしていた。僕を見た途端、それは僕に飛びかかってきた。

「！？！うわつ！？」

突進は避ける事が出来たが大きく体制を崩してしまつたため、壁に背中を強くぶつけてしまつた。

「痛うつ！？」

突進を避けられたそいつは勢いそのまま、鉄製のフロントにぶつかって、まだうずくまつていてる。

(今だ!)

僕は素早く家の中に飛びこみ、ドアを閉め、鍵とチーンをかけた。

はあはあはあ……。

少しづつ、冷静な思考を取り戻していく。すると今まで焦りと恐怖で忘れかけていた匂いに気付く。

(なんだ……この匂い) 恐る恐る匂いのする方へ近付く。そこには……。

「か、香織……！」

そこには変わり果てた香織がいた。腹は裂かれ、肉は削げ落ちていて、所々、骨がつき出でている。もはや人間とは思えない姿をしていた。

「ドンドンドンドンドン！」

ドアの叩く音がする。けどその音は僕の耳をすり抜けて行く。視覚以外は完全に閉ざされ、残った視覚も目の前に在るものしか写さない。そんな感覚が僕を支配していた。

「ドンドン……ベキッ！」

「…………なんで……お前、冗談だの……」んなのつてありかよ……

「…………香織……」

「ベキベキッ！ガシャン……！」

ドアが壊れた音がしたよなきがした。

……なんで香織がこんな目に遭わなければいけない。なんでたくさんの人の中から香織が選ばれなければいけない。他にもいたるうに……。

「ギシッギシッ……」

そいつが近付いてくる。誰が殺した？

誰が香織をこんな姿にした？

誰が誰が誰が誰が誰が誰が誰が誰が誰が誰が誰が誰が誰が誰が……

あいつだ。

そいつはまだ生きてる。 なんで？

香織は殺され、そいつはまだ生きてる。

……許さない。

殺してやる。

香織が味わった痛みをあいつにも…………。

近くにいる。僕は立ち上がり、振り向きざまにパンチを放つ。予想外の攻撃に成す術もなく、そいつは玄関の方へ吹っ飛んだ。僕は素早く距離をつめうずくまつて、そいつを蹴り飛ばした。

「あうう…………」

だが、そいつはすぐに体制を立て直し、逆に僕に襲いかかってきた。僕は素早くそいつの腕を掴み、合気道の容量でひねりあげ、ねじる。そして肘に手をあててそいつの腕を倒す。

ボキッ！！

「ヒ……ヒギヤアア！！」

腕が本来曲がりえない方向へ曲がっている。

僕はのたうちまわるそいつに馬乗りになつて、ひたすら顔を殴り続けた。

グチヤツグチャツ…… 気が付いたらそいつの顔は原形を留めていなかつた。頭蓋骨が砕け、その中からグチャグチャになつた脳が溢れている。もう死んでる。

僕は立つてその屍を見下ろす。

全体的なシルエットはほとんど人間だ。だが、細かいところが人のと異なつてうる。爪は分厚く、長くて、とんがつて、いる。関節部なんかは微妙につき出でているし、歯も一本一本が鋭い。

（俺が殺したのは本当に人間だったのか…………？）

血で濡れた自分の手に目をやる。

（…………？ そんな、馬鹿な！！）

自分の手じゃないと思った。それは俺が殺したやつの手の特徴と

合致した。

家に飛び込み、洗面所で自分の顔を確認する。

「な、なんだよ……これ」

そこには、鋭い歯をし、赤い目をした自分の顔が映っていた。  
(どつゆつ事だよ……)

「何事かと思ったら、まさかこんな所にエグゼムがいるなんて……  
気が付くとそこには僕と同じ年ぐらいの女の子が立っていた。」

「君は……誰?」

「あなたの仲間よ」

「なか……ま?」

「そうよ。同じ境遇を持つ仲間。同類とも言えるかな  
「言つてる事の意味がわからない。君は何を言いたいんだ?」  
「これ以上教えるにはひとつふたつ条件があるわ」

「条件?」

「そう、今から話つからよく聞いといで」

「そう言つと彼女はゆっくり話し始めた。その声には同情が混じつ  
てくる感じがした。」

「…………どつちにして辛い選択よ。ただ、条件に従うか、死  
を待つか、どつちかよ」

「…………少し考える時間をくれないか?」

「そうね、ゆっくり考えなさい。悔いの残らない選択をしてね」  
「そう言い残し、彼女は去つて行つた。」

警察が来るまで僕はずつと香織の側にいた。  
自分の手に目をやると、もとの形に戻つたある。(なんだよ、  
戻れんのかよ……)

ふと、きが遠くなる感じがした。意識が薄れつつある。……もつとつかれたんだろ？。

最後に僕は香織を見て言った。

「『めんな、香織。……俺、お前を守れなかつた……今まで……』  
ありがとう……」

僕の意識は完全に闇に包まれた。

侵食するものされるもの

考える時間は余りあるほどあつた。なのにまだ選択を迷つてゐる。あの時提示された条件、今の僕にはあまり考えたくない内容だった。

「…………一つ目、私達の仲間になる事。二つ目、あなたがつゝれつき殺したやつを、これからも殺し続ける事。それだけよ」

「…………え？ これからも殺し続ける？」

「殺し続けるつてどうゆう事だよ！？」

自然と語尾が荒くなつた。

ついさつき殺したばかりで、まだその感覚が残つてゐるといつのに。

「嫌なら拒否してもいい、ただそしたら自分の死を待つだけね」「死を待つ？ このまま放つておいたら、俺死ぬのかよ？」

わざかに声が震えた。

「特別にもう一つだけ教えてあげる。あなたはあるウイルスに感染しているわ。今のところ直す方法はない」とされている

（嘘だろ？ そんな事つて…………）

心の中で絶叫した。「…………さつき、こいつみたいなの殺し続けろつて言つたよな。直す方法がないなら、条件を飲んでも、断つても結局は同じじゃないか」

彼女は少し黙つた後、口を開いた。

「このウイルスは誰かがばらまいたものとされているわ。だからその誰かを見つけて、直す方法を聞き出す。…………何もしないよかは何かした方がいいわ」…………確かにそうだ、死を待つぐらいなら何かをしたい。出来る限りの事を。

だが、今の僕にとつての出来る限りの事は殺しだ。死体を積み上げて生き長らえるというのには抵抗がある。しかも治せない可能性だつてあるのだ。人を殺しまくつた挙げ句、治せなかつたという事になるかもしない。

「じゃあどうする？ 黙つて死を待つのか？ それはよく考えなさい。どっちにしても辛い選択よ」

。

香織の葬儀は一昨日終わつた。

昨日一日は、ずっと香織の祭壇の前で泣いていた。一昨日まではまだ香織が死んだという事実を受け入れる心の余裕がなかつた。両親が事故で死に、身寄りのない僕を他人同然の香織が引き取つてくれた。

香織は母さんの会社の後輩で、母さんと仲が良かつた。そのせいで、度々家に遊びにきた。その頃小学生だった僕は彼女とトランプをしたりテレビゲームしたりとよく遊んでもらつた。僕の親戚は香織が僕を引き取る事に反対したが、香織の説得であつさりと許可が下つた。みんな厄介事は持ち込みたくないと思っていたのだろう。香織は僕の事を本当の弟のように接してくれた。生活していくうちに僕も香織の事を本当の姉のように感じていた。失つて、もう触れる事すら叶わないと思つていた家族の温もりを香織は僕に感じさせてくれた。

けど、恐らくもう、こういった奇跡は起きないだろう。

香織は死んだ。

多分、僕の事を心から心配してくれる人はいないだろ？

多分、僕に救いの手をさしのべてくれる人はいないだろ？

僕はひとりになつた。

プルルル プルルル……

時刻は深夜二時。誰だ？こんな時間に。

「はい……

「一時間後に家の前で待ってる。決断はそれまでにして、そう言って向こうは電話を切った。

「…………一時間、か……」

もう自分の中では答えは出ている。

僕は死ぬのを待つことなんてしたくない。たとえ治せる確率が限りなく0に近くても、可能性がわずかでもあるなら賭けてみようと思う。

今はまだ救いの手が見えないだけで、前に進めば見えてくるかもしれない。

僕は必要なものだけをバッグに詰め込み、家を出た。

家の前で待っていると30分早く車が到着した。

「…………決心はついたわね？」

フロントガラスから顔を突きだし、彼女は尋ねてきた。

「…………ああ」

「そう…………、じゃあ乗って」

言われるがままに僕は車に乗り込んだ。

「なあ、これからどこ行くんだ？」

「私達が集まる場所よ」

「そこに行つて何をするの？」

「あなたの訓練」

「訓練する必要つてあるのか？」

なんの訓練もなしに僕は一人始末してるんだ。

「今のはあなたは侵食なしに奴らを殺すことはできない

「…………侵食つて何？」

「人じやなくなること。あなたも一度なったわ

ふとあの時の感覚が蘇る。それにあの手。

今考えればあの時の身体能力は異常だった。

「…………あれば侵食」

震える声で言うと、彼女は頷いた。

「だったら、訓練なんかしなくてもいいんじゃないかな？ 侵食をすれば

「侵食は寿命を縮めるの。数回なら大丈夫だけど、使いすぎると危険なのよ。それに、制御も難しいし……」

「でも、あの時は『ントロール出来たぜ？』

「それは最初だけよ。時間がたつにつれできなくなるわ

「どうゆう事？」

「侵食は精神と肉体の両方を蝕むの。肉体を侵食するスピードと精神を侵食するスピードでは前者の方が速くて、その前者と後者のタイミングが正気を保つていられる時間となるわけ。あなたみたいに発現してまもない頃は精神を侵食するスピードが遅く、肉体を侵食するスピードは速いの。だからあの時、あなたは正気を保つたまま戦えたわけ」

一気に多くの事を教えて僕の頭はひどく混乱していたが、ある程度の事は理解出来た。

「じゃあ、時間が経過するほど精神を侵食するスピードが速くなるわけだ」

「そうよ。あと侵食をすると、してない時の約5倍のスピードで精神が蝕まれていくわ。発現してまもない初期段階のあなたでも一時間侵食を使っているだけですぐに最終段階になるわ」「最終段階になつたらどうなる？」

「『死ぬ』より嫌なものになる……」

うつ向いていたから顔がよく見えなかつたが、彼女の口調が悲しげに聞こえた。

『死ぬより嫌なものってなんだよ？』って聞きたかったが、そんな質問を拒否するかのような雰囲気が車内にあつたので、聞けなかつた。

氣まずい沈黙をなんとかするべく、僕はそんなに気にしてなかつた事を聞いてみた。「あの時君は俺の事を見て『エグゼム』って言ったよね、あれってなんの事？」

今まで進行方向に向けられてていた顔がチラツとこっちを一別し、言葉を返してきた。

「ある人がふざけてつけたあなたみたいな人の総称よ。今じゃ定着してるけど」

「ふざけてつて……」

今の自分を馬鹿にされているみたいで嫌な気分だ。

走り始めてだいたい三時間。気が付けば周りは都会のコンクリートジャングルから木の生い茂る山道へと変貌していた。

「あ、見えた。あそこよ」「え……？なんでこんな所に……」「

そこにはびっかのホラー映画にでてきそうな洋館が不気味に建つていた。

「私よ。夏月玲奈よ」

彼女が横でイヤホンにそう告げるとギイイと嫌な音をたてて大きな門扉が開いた。

「…………君、夏月玲奈つていうんだ」

「そうよ。まだ言つてなかつた？」「まともな自己紹介なんてしないからね。…………そういえば君は俺の名前を知つてるの？」

「朝倉和也でしょ？」

「え……なんで知つてんの？」

「郵便受けや名札を見たからよ」

「なるほど、だからか。

僕の郵便受けと名札には、僕と香織の名前がフルネームでかいてある。僕たちは地のつながった家族ではないから当然、姓はちがう。

前を向いていた彼女の顔が突然こっちを向いた。

「…………これからよろしくね、朝倉和也さん」

「……え！？あ、うん。こっちこそよろしく」

……今さらながら彼女の顔立ちがとても綺麗な事に気がつく。

「……何かした？」

気が付かず僕は彼女の顔に見入っていたようだ。

「いや、なんでもない」

視線を車の外に巡らすと地下の駐車場みたいな場所だった。

「ここは？」

「さっきの洋館の地下の駐車場よ」

「あの洋館で何をするんだ？」

「あそこでは何もしないわ。あの洋館は飾りなの」

「じゃあ、どこに？」

「すぐわかる」

そう言って彼女は車から出て、少し先にある扉に向かっていった。  
僕も彼女についていく。

何故だか僕にはその扉がとても重く見えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5023a/>

---

遠ざかる日常

2010年10月9日06時21分発行